

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。

野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事に使いけり。名をば、さぬきの造となおひひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。

それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。

〈現代語訳〉

今から見れば昔のことですが、竹取の翁という人がいました。野や山に入って竹を取っては、さまざまなことに使っていました。名前をさぬきのみやつこといいました。

その竹の中に、根もとの光る竹が一本ありました。不思議に思つて近づいて見ると、筒の中が光っていました。その中を見ると、三寸（約十センチメートル）ほどの人がとてもかわいらしいすがたですわっていました。

竹取物語たけとりものものがたり



今は昔、竹取の翁いまむかし たけとり おきなといふものありけり。

野山のやまにまじりて竹を取りつつ、よろづの

事ことに使つかいけり。名をば、やぬきの造みやういと

なむいひける。

その竹たけの中なかに、もと光る竹ひか たけなむ

一筋ひとすじありける。

あやしがりて寄よりて見るに、筒つつの中なか光りたり。

それを見みれば、三寸さんすんばかりなる人ひと、

いとうつくしうてゐたり。